

Title	18世紀欧州から見たアメリカ像： オランダ人ドゥ・パウの言説とその反響
Sub Title	Una visión del continente americano que tenía la Europa en el siglo XVIII : El discurso del holandés De Pauw y su repercusión en la Europa
Author	前田, 伸人(Maeda, Nobuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.37 (2022.) ,p.231- 251
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20220630-0231

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

18世紀欧州から見たアメリカ像

——オランダ人ドゥ・パウの言説とその反響——

前 田 伸 人

はじめに

0-1. 問題の所在

本稿は、18世紀啓蒙主義時代のオランダに生まれたコルネリウス・ドゥ・パウに焦点を当て、彼が提示した新大陸に関する論考の内容や特徴を検討し、同世紀の他の論者に与えた反響を明らかにすることが目的である。

18世紀は、新大陸がイベリア半島の両国の金城湯池であっただけでなく、英国、フランス、オランダ、北欧等の諸国もまた、北アメリカやカリブ海の島嶼、南アメリカの辺縁に拠点を築いてサトウキビやタバコ農園を設立し、貿易の利を上げる情勢が存在していた。まさしく新大陸が実利的にも思想的にも、欧州全体の関心を招来していたのである。

そうした中、プロイセン公国の啓蒙専制君主フリードリヒ二世が治める首都ベルリンで、ドゥ・パウはアメリカ大陸とその先住民に関する論考を1768年から翌年にかけてフランス語で公刊した。その辛辣で激しい調子が欧州の論壇を揺るがし、同書は版を重ね、他言語にも翻訳された。突如彗星の如く登場した本人だったが、19世紀初めにナポレオンによる顕彰が行われた後は、全く忘却された。再び注目されたのは第二次世界大戦前後である。とくに、イタリアからペルーに亡命したジェルビが新大陸に関する研究を公刊したことも大きい。本稿では、ドゥ・パウの著作を中心に18世紀の著作や20世紀の研究論文等を扱いつつ、テーマの解析を進めていく。

0-2. 書誌と研究史

洋の東西を問わず、18世紀はフランスで新旧論争に見られる通り、それまでの古い考え方と新しい考え方とを比較考量し、検討し、その利得が論じられた時代でもあった。ただし、欧州では、理性を重視して迷信を切り捨て有用性を重視する啓蒙主義の進展とともに、諸国の対外進出が一層進捗して貿易の利を重んずる時代ともなった。さらに、自分たちの文明度を高く見積もるようになる姿勢が際立ってきた風潮が登場した時代でもある。

今回焦点になるのがドゥ・パウの著作で、ベルリンで発刊された『アメリカ人に関する哲学的論考』⁽¹⁾である。同書の見解に反論を加えたのが、同じくベルリンにいて同地のアカデミーで自説を開陳したペルヌティ⁽²⁾である。ドゥ・パウの論考には、18世紀の生物観・地球科学観が背後にある。そのドグマを提供することになったのが「文は人なり」で有名なビュフォンで、『自然誌』⁽³⁾に類似した考え方が提示されている。このような自然環境決定論的な見方は、古代に遡ってヒポクラテスの著作に発しているが、18世紀ではモンテスキューが自然環境と政治体制との相関を『法の精神』⁽⁴⁾において展開した。

ドゥ・パウやビュフォンの言説は新大陸出身者の反発を招いた。スペイン領アメリカからはフランシスコ・クラビヘロが『メキシコ古代史』⁽⁵⁾を出し、合衆国ではトマス・ジェファーソンが『ヴァージニア覚書』を公に

(1) Cornélius de Pauw, *Recherches philosophiques sur les Américains*, 2 vols. (Berlin: G. J. Decker, 1768-69).

(2) Antoine-Joseph Pernety, *Dissertation sur l'Amérique et les Américains* (Berlin: G. J. Decker, 1770) (<https://gallica.bnr.fr/ark:/12148/bpt6k1065220?rk=21459;2:2022/01/15>参照).

(3) George Louis Leclerc Buffon, *Histoire naturelle, générale et particulière*, 44 vols. (Paris: Imprimerie royale, 1749-1804).

(4) Charles Louis Montesquieu, *L'esprit des lois*, 3 vols. (Genève: Barillot et ses frères, 1748-50).

(5) Francisco Clavigero, *Storia antica del Messico*, 4 vols. (Cesena: Gregorio Biasini, 1780-81).

した。

先述したように、新大陸への関心は18世紀には欧州全体で大きかったので、啓蒙主義的な観点からその歴史を書き改めようとする著作も登場した。スペインでは、ファン・パウティスタ・ムニョスの『新大陸史』⁽⁶⁾が公刊された。またフランスでは、ギヨーム・レナール師による『両インド史』⁽⁷⁾が出た。両インド、つまりアジア地域のインド周辺を指した東インドと、新大陸を指す西インドに焦点を当て、両地域で展開された欧州の対外進出を総覧し考究した浩瀚な著作であった。また、スコットランド啓蒙主義者のウィリアム・ロバートソンは『アメリカ史』⁽⁸⁾などの新大陸研究を公にした。

今度は研究書、研究論文に目を向けよう。ドゥ・パウの経歴などを紹介した論文が幾つかある。英語ではヘンリー・ウォード・チャーチによる論考⁽⁹⁾は、ドゥ・パウの送った経歴の他、問題作の反響についても簡潔に纏めている。また、出身国のオランダからもファン・トゥ・ヘールによるオランダ語の論考⁽¹⁰⁾がある。さらに、ドイツでは、フリードリヒ二世との関係に注目したギスベルト・バイヤーハウスによる論考⁽¹¹⁾がある。何れの論

(6) Juan Bautista Muñoz, *Historia del Nuevo Mundo* (Madrid: Viuda de Ibarra, 1793).

(7) Guillaume Thomas François Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissemens & du commerce des Européens dans les deux Indes*, 6 vols. (Amsterdam, 1770).

(8) William Robertson, *History of America*, 2 vols. (London: Strahan, 1777-78).

(9) Henry Ward Church, "Corneille de Pauw and the Controversy over his *Recherches Philosophiques sur les Américains*", *PMLA*, LI (1936), pp. 178-206. (<https://www.jstor.org/stable/458321>: 2022/01/15参照).

(10) H. van t'Heer, "Kannunik Cornelius Franciscus de Pauw (1739-1799) en de verlichtung", *Tijdschrift voor Filosofie*, XXX, (Dec., 1968), pp. 715-731. (<https://www.jstor.org/stable/40881348>: 2022/01/15参照).

(11) Gisbert Beyerhaus, "Abbé de Pauw und Friedrich der Grosse: Eine Abrechnung mit Voltaire", *Historische Zeitschrift*, 134 (1926), pp. 465-493. (<https://www.jstor.org/stable/27605504>: 2022/01/15参照).

考も、ドゥ・パウの経歴について細かな違いがあるのが散見される。

ラテンアメリカ史の観点から、ドゥ・パウを含めたヨーロッパ人による新大陸記述の構図を簡潔に提示したのがデイヴィッド・ブレイディングの著作⁽¹²⁾である。ジョン・ロウの論考⁽¹³⁾は16世紀を中心とした新大陸記者の分析用語に注意を向けている。第二次世界大戦中にペルーで、欧州人の新世界観を考究したアントネッロ・ジェルビの書⁽¹⁴⁾は、まさしく博識な書である。1750年から1900年に至る新大陸を巡る言説の歴史を描き、ドゥ・パウについてもページを割いている。

0-3. 章立て

これまでの研究では、新大陸の自然が退化しているという面だけがドゥ・パウの特質として語られてきた。他と比較してドゥ・パウの考え方がどのように位置づけられるかが、必ずしも明解でなかった。さらに、ドゥ・パウの執筆動機、思考の前提が奈辺にあったかについても明確とは言い難かった。本稿では、こうした不明な点を聊かでも明らかにして、ドゥ・パウがなぜ啓蒙主義時代に歓迎されたか、その背景や理由を再考するものである。

その観点に立って、本稿の編成は以下ようになる。第一章では、ドゥ・パウ以前のヨーロッパ人が新大陸に注いだ視線、思考法を整理する。第二章では、本稿の中心的人物であるドゥ・パウに焦点を当てる。そのためパウの経歴を述べ、彼の代表作の流れを押さえ、その特徴や内容を明らかにしていく。また、併せて彼の見方を支える自然観を与えたビュフォンらの所説を整理していく。そのあと、第三章では、ドゥ・パウの所論に対する反応や反駁を整理する。併せて、触れる機会の少ないジェルビの経歴

(12) David Brading, *First America* (Cambridge Univ. Press, 1991).

(13) John Rowe, "Ethnography and Ethnology in the Sixteenth Century", *The Kroeber Anthropological Society Papers*, 30 (1964), pp. 1-19.

(14) Antonello Gerbi, *Disputa del Nuovo Mondo* (Milano: Ricciardi, 1955).

も紹介する。第四章ではまとめとして今後の究明課題を提示する、という流れになろう。

第一章 啓蒙主義以前の新大陸観の流れ

1-1. 新大陸記録者前後の諸概念

中世以来、異民族を指すのに用いられた術語に“野蛮人”とか“未開人”がある。スペイン語なら各々 *salvaje*, *bárbaro* という語がそれらに相当しよう。これら二つの術語は次のように区別されるという。*salvaje* は本来、森の人を指す語である。中世においては、体毛で覆われた裸人で、森の中で孤独な生活を営み、洞窟や樹木の下で眠り、狩猟採集を営み、社会的で政治的な組織を持たない人々がイメージされた⁽¹⁵⁾。また、*bárbaro* は古代ギリシアでは非ギリシア人を指した。16世紀の欧州では意味が拡張して、隣国の人々を指すことに限定されず、一方で非キリスト教徒、他方で古代のローマやギリシア人を指す術語として使われるようになり、この語を非キリスト教徒に用いると、悪徳的な性格の含みがあったとされる⁽¹⁶⁾。

では、文明や文化を指す言葉は何が使われ、どんな含意があったのだろうか。次のようになる。スペイン語では *policía* を用いたが、古代ギリシアのポリスに由来する語ゆえ、古代世界では組織化された政体やそれに付随する良き市民の連合体の含意を持つ。16世紀の欧州では拡張された語義を持つようになり、政治面に加えて文化面の洗練さをも意味し、文明といった方面にも拡張された。18世紀には *civilización* の語がそれに代わったとのことだ⁽¹⁷⁾。こうした術語が新大陸の先住民や文化を指すのに用いられた。

(15) John Rowe, *op. cit.*, p. 5.

(16) *Ibid.*, p. 6.

(17) *Ibid.*, pp. 6-7.

1-2. オビエドとアコスタ

スペインは16世紀に新大陸に進出し、先住民の文明を滅亡させて同地を支配下に置いていった。侵略が急速に進展する流れがある一方で、新大陸の自然は旧世界のそれとどのように異なるのか、先住民が果たして人間であるか否か、キリスト教布教はどうあるべきか、世界を俯瞰して人類の文化段階の分類は可能であるか、といった様々な論議やその政策化までもが進行した。

そうした中で、新大陸の認識の転換に関して、一対にして扱うべき人物群がいる。一人がゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエドで、もう一人がホセ・デ・アコスタだ。

オビエドは16世紀前半に新大陸に渡って行政官を務め、同地の自然環境に注目した著作をも刊行した。それが『新大陸に関する総合史ならびに自然誌』⁽¹⁸⁾である。タイトルに注目しよう。“総合史”とはある意味中世の武勲詩の系譜である。具体的には、スペイン人による異民族や異教徒の征服史を意味しており、かつてイベリア半島でイスラム勢力に対して仕掛けたレコンキスタの延長にある。また、自然誌ないし博物誌は、動物や植物、鉱物といった三界の分類やその特徴、効能等の記載を行う学問である。なお、先住民は人間に位置づけられておらず、自然の領域に属するものとされた。同時代の学者でイタリアのルネサンスに触れたセプルベダが唱えた、先住民すなわち先天的奴隷とする考え方に近い。

こうした認識に大きな転換を図ったのが、アコスタであった。彼は『新大陸に関する自然誌ならびに文化史』⁽¹⁹⁾を執筆した。このタイトルに転換が顕現している。まず、武勲詩ともいふべき「総合史」のタイトルが消えている。また、「自然誌」により三界の描写はより精緻になる。また、先

(18) Gonzálo Fernández de Oviedo, *Historia general y natural de las Indias* (Sevilla: Cromberger, 1535).

(19) José de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias* (Sevilla: Juan de León, 1590).

住民が自然の領域から人間の範疇に移されているため、「文化史」の修飾語が登場しているのである。因みに、この形容詞の「モラル」は、ラテン語の「集合的な習慣、慣習」の意味を持つモーレスの形容詞であるため、「精神的」の意味よりは、むしろ習慣、文化体系を意味しているからだ²⁰。

そしてアコスタは、新大陸の先住民の生態と生活形態を分類する作業を行い、三つの分類を提示している。これは静態的な分類にとどまらず、一種進化的な見方をも内包している。上で挙げた著作の中で次のように示す。第一のタイプは王国ないしは帝政で、インカ族やモクテスマの王国がその例とする。第二のタイプは多数の助言を受けて統治される共同体で、成員すべてが助言役を務める。戦時にはその中から将軍が選抜され、平時には各共同体が自立し、成員により尊敬を勝ち得ている者が首長になる。第三のタイプは全く野蛮人同然で、法も王もなく、定住もしない。常に野獣のように放浪する集団だとする²¹。

これに関連した言及だが、アコスタはラテン語で書かれた著作『先住民の救済を獲得する手段について』でも非キリスト教徒の分類を行っているようだ。最初のタイプが、文字を持ち、それを使用することができ、それゆえ、文化を持っている人々で、中国人や日本人がそれにあたる。さらに、第二のタイプとしては、文字を持たないが、組織化された政府や宗教を持ち、定住生活を送る人々で、メキシコ人やペルー人がそれにあたるとする。第三番目のタイプには、カリブ海島嶼部やブラジルに住む人々を野蛮人として分類している。このタイプの中にも更に二つのタイプがあり、野獣と同じで組織の類を持たないものや、何らかの組織を持ちより平和的に振舞うものがあるとする²²。

²⁰ John Rowe, *op. cit.* pp. 6-7.

²¹ José de Acosta, *Historia natural y moral de las Indias* (Madrid: Historia 16, 1986), pp. 418-419.

²² John Rowe, *op. cit.*, p. 8.

1-3. ラフィット、ウリョア、ラ・コンダミーヌ

18世紀には上で述べたアコスタの延長上にある人物にイエズス会士フランソワ・ラフィットが出た。彼はカナダや合衆国に居住するイロコイ族への布教活動を経験している。バールのような懐疑的哲学者に異議を唱え、先住民の言葉の象徴性を読み解き、彼らの起源が共通していることを解明し、アメリカ先住民を世界史の中に取り込む姿勢が顕著であった²³⁾。

自然状態の先住民を称揚する立場で見た場合、こうした先住民像は“良き野蛮人”と呼ばれる。アフラ・ベインの小説に見る『オルノーコ』、ジャン・ジャック・ルソーの著作に典型的であろう。なお、17世紀のインカ・ガルシラーソは『インカ皇統紀』を著して、むしろ洗練された文明・文化が先住民にあったことをも強調する。

18世紀は理性の時代であるゆえに、迷信を排除し、時に象徴性をも排撃する傾向があった。1730年代にスペイン支配下にあったペルー副王領のペルーやエクアドルで地球の形状を決定するために緯度計測を行ったが、それに参加したアントニオ・ウリョア²⁴⁾やラ・コンダミーヌ²⁵⁾らは旅行記を公刊した。ウリョアはスペインの科学者で役人だったから、測地学的な観測の結果を記すとともに、副王領の非能率性や先住民の無気力を告発した。

第二章 ドウ・パウの新大陸観

2-1. ドウ・パウの経歴と人間関係

渦中の人物であるドウ・パウについて経歴を述べておこう。オランダでの論考を下敷きにすると以下のようなになる。1739年アムステルダムに生まれ、1799年ドイツのクサンテンで死去する。共和国法律顧問のドウ・ヴィ

²³⁾ Anthony Pagden, *La caída del hombre* (Madrid: Alianza Editorial, 1988), p. 24.

²⁴⁾ Antonio de Ulloa and Jorge Juan, *Relación histórica del viaje a la América meridional*, 4 vols. (Madrid: Antonio Marín, 1745).

²⁵⁾ Charles Marie de la Condamine, *Relation abrégée d'un voyage fait dans l'intérieur de l'Amérique méridionale* (Paris: Veuve Pissot, 1745).

ットに連なる家系である。幼時に両親を失うと現ベルギーにあるリエージュの親族に預けられ、同司教座の参事会員に才能を見出され、イエズス会の神学校やゲッティンゲン大学などで学ぶも、副助祭職しか得られなかった。彼には義理の兄がいたが、マリア・テレジアに見いだされのちにプロイセンのフリードリヒ二世に仕えた人物だったが、プロイセン支配下のクサンテンに所領を持っていた関係で、ドゥ・パウは同地の参事会員職を世話してもらった。そのあと、クサンテン司教座の立て直しのためにドゥ・パウは、義理の兄が顧問を務めていたフリードリヒ二世のもとに1767年派遣された。その際、ベルリンにいたギシャールの下に逗留してその仲介を受けて王に面会した。王からは図書館の司書に任命されたり、プロイセンのプレスラウの参事会員になるようにも勧められている。しかし、宮廷の情勢を判断してベルリンを結局去った。以後は、再度のベルリン訪問を除くとクサンテンを動かずに死去したというのが彼の一生である²⁶⁾。

彼の経歴には細部で諸説がある。例えば、外交官や文化人を輩出した家系で、イエズス会に対する反発は神学校の時に培われており、ゲッティンゲン大学に登録した証拠はないという説もある²⁷⁾。また、パウの息子がアメリカ独立戦争に参加したとか、その子孫が合衆国のドゥ・ポー大学の創立者とする説、それらを否定する意見もあるようだ²⁸⁾。

著作についてチャーチの所見を参照すると以下のようになる²⁹⁾。ドゥ・パウの処女作は本稿で扱っている『アメリカ人に関する哲学的研究』で、計二巻を1768年から翌年にかけてベルリンで出版した。ペルヌティから反論が向けられると、パウは再反論を行うべく1770年にベルリンで自著を再版した。さらに第三版をロンドンで1771年出版した。その上、ベルリンでさらに三つの版を1771、72、74年に次々と出版した。パリでもパウの死後、

26) H. van t'Heer, *op. cit.*, pp. 715-717.

27) Gisbert Beyerhaus, *op. cit.*, pp. 465-466.

28) Henry Ward Church, *op. cit.*, pp. 178-180.

29) *Ibid.*, pp. 184-185.

同書が1799年に刊行された。外国語訳は、独訳が1769年、蘭訳が1771年から翌年にかけて、英語訳が1789年、1795年、1806年に出版された。また、百科全書の補遺版にアメリカの項目³⁰⁾を執筆した。

ドゥ・パウは後にエジプト人と中国人の起源に関する著作を出した。ギーニュが提唱した中国人エジプト起源説を否定し、ヴォルテールも条件付きでドゥ・パウに賛同している³¹⁾。

2-2. ドゥ・パウによる新世界像

パウの処女作『アメリカ人に関する哲学的研究』の目次を挙げておこう。第一巻は次の通りである。三部構成で、第一部は「アメリカの気候やその住民の改悪された気質、新世界の発見などについて」と題目が付く。第二部は、第一節が「アメリカにおける人類の多様性」、第二節が「アメリカにおける人類の多様性」、第二節が「アメリカ人の体色について」、第三節が「食人種について」である。第三部は、第一節が「エスキモーについて」、第二節が「パタゴニア人について」となっている。

また、第二巻は次のような構成である。第四部から第六部の三部からなる。第四部は、第一節が「青白い肌の人と白い黒人について」、第二節が「オランウータンについて」、第三節が「フロリダ半島の両性具有者について」、第四節が「割礼と陰部封鎖について」である。第五部は、第一節が「アメリカ人の愚鈍な特性について」、第二節が「二つの大陸に共通するいくつかの奇妙な習慣について」、第三節が「二つの大陸の人々の間に見られる毒矢の使用について」である。第六部は、「著者のはしがき」のあと、複数の書簡が掲載されている。すなわち、第一書簡が「アメリカ人の宗教について」、第二書簡が「リヤマについて」、第三書簡が「我々の地球の転変について」、第四書簡が「パラグアイについて」である。

パウは上記の著作で何を考究するのか。序文において次のように記して

³⁰⁾ De Pauw, “Amérique”, in *Supplément de l'Encyclopédie*, Vol. I, pp. 343-354.

³¹⁾ Henry Ward Church, *op. cit.*, p. 182.

いる。「アメリカ人は人類史の中で最も興味ある一章であるが、最も知られていない一章だから、この先住民をわれわれの主な研究対象として目指すつもりだ」とし、とりわけ、「アメリカ人の身体形質の特異性や、時に精神的な思考の特異性を考察するつもりである」と述べる³²。

そのあと、新世界の発見が欧州や人類全体にとりどんな意義があるのかを述べている。すなわち「人類の歴史の中でアメリカ発見という事件ほど記念すべき事件はない」とする³³。

だが、欧州にとってその事件が本当に利益になるかには懐疑的であるようだ。「この新世界が自然によって余りにも災厄を受けているので、すべての存在が退化しているか、怪異になっているこの西半球を見ることは、疑いもなく深刻で恐るべき光景である」として不利益な側面を強調する³⁴。

ここにある自然環境の苛烈さや「退化」という表現に注目すべきである。「アメリカ大陸の気候は発見当時四足獣の大部分にとってとても有害であり、その四足獣は旧世界の対応物よりも六分の一小さいのである」として、生物の矮小化に言及している³⁵。旧大陸から移入した動物も同様な運命である。発育が悪く、体長が縮み本能や特性の一部を失ってきた。しかも、軟骨や筋肉が固くなり、革のように固くなってたと述べている³⁶。

逆に有害生物にとっては、新大陸の地は最適であった。スリナムに赴いて昆虫を採集したメーリアンの記録を引いて、虫は何れも繁殖が旺盛で、体長も大きいことを指摘する³⁷。

さらに「南アメリカや島嶼の大部分においては、大地は腐敗して有害で、致命的ですらある水に埋め尽くされており、他方、太陽の熱が一種の発酵を引き起こしていた」とも述べている³⁸。同緯度のアフリカなどよりも気

(32) De Pauw, *op. cit.*, Vol. I, p. i.

(33) *Loc. cit.*

(34) *Loc. cit.*

(35) *Ibid.*, p. 4.

(36) *Ibid.*, p. 13.

(37) *Ibid.*, p. 7.

温が低いことも指摘している³⁸⁾。このため、人間にも悪影響を及ぼし、その鈍さをもたらしたとする。新大陸の住民を「子供のあらゆる欠点を持つ人種集団」, 「臆病で無能で、物理的な力を持たず、向上心もない」がその例だ⁴⁰⁾。おまけに、同地で出土する骨は人間の生存に不向きなことを物語っているとする⁴¹⁾。

ビュフォンはアメリカ大陸では自然がまだ青年期の状態にあり、ほんの少し前に生物を組織化し活性化したに過ぎないと考えているが、ドゥ・パウは昔から自然の苛烈さがあるとみているようだ⁴²⁾。

ドゥ・パウにとっては新大陸の発見が征服側にも被征服側にも利益がないことを強調する。つまり、新大陸の住民は力の差がありすぎて急速に滅ぼされる結果となった。他方、征服者の側も病気をうつされていき生殖器官に悪影響が及んだ⁴³⁾。

彼はさらに、悲観的な見方をしている。もし同様な征服劇が繰り返されれば世界的な滅亡に繋がるとする。まして、テッサ・アウストラルすなわち“南の大陸”を探検でもしようものなら、まだ見ぬ先住民を鎖につなぐことになりかねないし、すでに先住民が持つ欧州に対する不満をますます増加させるだけだと苦言し、まして科学や地理学の名で地球の破壊に手を貸すべきではなく、レオミュールの気温計を設置してニューギニアの気候を知るためにパプア人を殺戮してはならないとも述べる⁴⁴⁾。さらに、モラリストの偽善を告発してもいる⁴⁵⁾。ここから文明圏の限界と未開圏への不介入主義の姿勢を明確にしていると言える。

38) *Ibid.*, p. 5.

39) *Ibid.*, p. 11.

40) *Ibid.*, p. x.

41) *Ibid.*, p. 12.

42) *Ibid.*, p. 23.

43) *Ibid.*, pp. ii-iii.

44) *Ibid.*, pp. iv-v.

45) *Ibid.*, pp. v-vi.

新大陸はもはや征服で破壊されたので、空と大地と記憶が残るのみとしている。16世紀スペインのオビエドの言を引き合いにして、博物学者が研究できない程になってしまっている⁽⁴⁶⁾。航海者のもたらす報告も当てにならないとみている。とくに巨人が存在するという報告が当てにならないことを強調している⁽⁴⁷⁾。

宣教師に対する批判は二つの点からなる。一つは、宣教師の報告書（模範書簡集）が情報源として信頼がおけないことを次のように指摘する。すなわち、彼らの報告書を読むと不条理と宗教的奇蹟の話題に導かれるだけである。世界の果てまで行つたと豪語する割に彼らの言に余りに虚偽が多いのに驚かされる。宗教的熱情に曇らされて物事を正しく見ることができなくなった結果だ。もはや奇蹟の話ばかりで真実がせいぜい二つ三つしかない彼らの話からは、人々はもはや何も期待していないと述べている⁽⁴⁸⁾。

今一つは、強力な修道会イエズス会に対する批判である。同会は欧州の多くで解散を命じられ、ポルトガルで1759年、フランスで1764年、スペインでは1767年であった。そうした情勢と著者の積年の恨みが記述にあるのかもしれない。ドゥ・パウは、第二巻末においてパラグアイに教化村を建設した同会の動きを告発している。つまり、ペルー副王カステルフエルテの時代に派遣した巡察使が同会から妨害を受け、命の危険にさらされ、訴えたのちに投獄された事件を光景化し、イエズス会が専制君主然としつつ先住民を奴隷化して自分たちの共和国を形成していると告発している⁽⁴⁹⁾。

2-3. 背後にある自然像と気候決定論

自然が人間の気質や制度、歴史にまで影響を与えるとする、自然環境論的な思想は古代からあった。ギリシアのヒポクラテスは、その著作『空

(46) *Ibid.*, pp. vi-vii.

(47) *Ibid.*, pp. xv-xvii.

(48) *Ibid.*, pp. vii-viii.

(49) De Pauw, *op. cit.*, Vol. II, pp. 352-356.

気・水・土地について』の中で、人間の体質・生理・病気と都市の位置、風向、水質などとの関係を論じた⁵⁰。

18世紀になると、神学的世界観が徐々に後退し、啓蒙的・機械論的な風潮とともに自然環境論的な考えが強くなった。モンテスキューがその代表である。その著作『法の精神』において、第十四編第一章では、法と気候帯ないし風土との一般命題を示す。風土が異なれば精神の性格、ひいては法制度の違いをもたらすと述べる。続いて第二章では、冷気と暖気が人々の体液や神経に影響を与えることを図式化する。つまり、寒い地方の人は勇敢だが感受性に乏しく、道徳的である。他方、暑い地方の人は臆病だが感受性が強く、悪徳も多い。また、極度に暑い地方では、衰弱甚だしく怠惰や隷属状態が当然になる可能性も指摘する。では、彼は自然環境がすべてを決定すると考える論者かというところではない。第五章では、環境の制約を認識した上でそれを乗り越える立法者を良き立法者だと考える⁵¹。

ドゥ・パウでも散見するビュフォンは、より生物学的な装いをまとめて、新大陸の四足獣や人間が苛烈な自然の下、退化しているさまを描いている。次の四つにまとめられる。

一つの要点は、新大陸が寒い大陸であることだ。寒いので暖気を必要とする四足獣や大型動物、人間の繁殖には不利に働く。おまけに居住する人間の数も少なく野獣同然の生活をしているため、土地の改良ができず手付かずのまま寒さの脱却には至っていないとする⁵²。

二つ目の要点は、これとは逆になる。昆虫や両生類、腐敗や沼沢地に住んで血液が水であるような生物すべては、こうした環境が有利に働きますます繁殖していくと述べる⁵³。

50) ヒポクラテス『古い医術について』小川正恭訳、岩波書店、2010年、pp. 7-37.

51) モンテスキュー『法の精神』野田良之、稲本洋之助、上原行雄等訳、岩波書店、1989年、pp. 27-37.

52) George Louis Leclerc Buffon, *Œuvres complètes de Buffon*, Tome IV, (1884-86), p. 586.

三つの目の要点は、アメリカ大陸の若さである。アメリカ人は新しい人種あるいは昔日別の場所から新大陸に移動してきた中であらゆる観念を失ってしまった人種とみる。それで新大陸の大部分は人の支配下に置かれておらず、後代、森林を伐採して沼沢地を塞いだりして寒さを除いて初めて豊かな土地になるのは何世紀もあとだとする⁵⁴。

四つ目の要点は、アメリカ人が生氣を欠くことだ。体毛もひげもないし、生殖器も小さい。男性は女性に対する熱情にも乏しい。感受性に乏しく、臆病で卑劣である。必要な活動を除いては鈍重だとみなしている⁵⁵。

ここで、冷涼な環境が下等動物の発生に有利に働くとするのは、無ないし腐敗の中から生物が生ずるとする自然発生説をビュフォンは採用している。この考え方は、ビュフォンの友人であるニーダムの実験による知見を基にしている⁵⁶。

第三章 ドウ・パウの影響

3-1. ペルヌティからの反論

3-1-1. ペルヌティの経歴

アントワヌ・ジョゼフ・ペルヌティはドン・ペルヌティ（1716-1796）とも呼ばれ、ベネディクト修道会士である。経歴は次のようになる。1763年、ブーガンヴィル提督によるフォークランド諸島遠征に同行し、入植しようとするもスペイン政府の反対で頓挫した。その後、1767年には修道会を脱けてプロイセンのフリードリヒ二世の下に赴き、図書館司書を務めた。ドウ・パウの著作公刊に対抗して、1769年9月7日ベルリンのアカデミーでアメリカ先住民に関する発表を行った。また、同地でスウェーデンボリに触発を受けてイルミニズム（照明説）を奉じた。のちにベルリンを去り、

⁵³ *Loc. cit.*

⁵⁴ *Ibid.*, p. 587.

⁵⁵ *Ibid.*, pp. 582-583.

⁵⁶ Charles Singer, *A History of Biology* (London: Abelard-Schuman, 1959), pp. 440-444.

アヴィニョンでイルミニズムの集団を再建した。内紛やフランス革命の発生でこのグループは潰れ、彼自身も最後はカトリックとして死去した⁵⁷⁾。

3-1-2. ペルヌティの反論

ペルヌティがベルリンのアカデミーの演説を公刊した著作は『アメリカとアメリカ人に関する論文』である。その構成は、序文のあと、第一部にドゥ・パウの著作の要点を記している。そのあとの第二部は三つからなる。その第一節は「アメリカの土壌について」、第二節は「アメリカ人の身体的特性について」、第三節は「アメリカ人の感受性と知性について」である。18世紀当初のフランス人航海者フレジエやファイエーの引用も見える。

ペルヌティはその論文の中で、ドゥ・パウを書斎人の戯言として次のように批判する。ドゥ・パウがもし現地入りをしていたなら別の視点を確保し、問題作を公刊することはなかっただろうと述べ、真実を曲解する固い決意があったとしか思えないようだ、と皮肉っている。さらに、万卷の書を踏破して考察を重ねた成果とも思えず、性急な読書と偏見の産物ではなからうか、とも厳しく非難している⁵⁸⁾。

ペルヌティは、厳しい自然条件によりアメリカ人が退化したり矮小化したりする見方に反対している。その反例として巨人の存在を認容する記述を行い、様々な旅行者の記録を引きドゥ・パウの姿勢を次のように批判する。パタゴニア地方に居住する巨人の存在が、新大陸における人類を退化させているとする主張を揺るがしていると言い、結局ドゥ・パウはその存在を消すために全力を傾注しているのだと皮肉り、その存在を消すために彼が依拠する資料は混沌そのものだ、却ってそんな資料に目を通したことのない人こそ嘘を見破るのが易しいとも付言している⁵⁹⁾。また、プリスト

57) Micheline Meillasoux-Le Cerf, “Dom Pernety”, *Histoire, Économie et Société*, Vol. 7, no. 2 (1988), p. 285.

58) Antoine-Joseph Pernety, *op. cit.*, pp. 11-12.

59) *Ibid.*, pp. 82-83.

ックの旅行記を使いつつ、アパラッチ族文明の高尚さを称えている⁶⁰。

3-2. クリオーリヨからの反発

ドゥ・パウの主張に鋭敏に反応したのはスペイン領アメリカ出身のクリオーリヨたち、つまり同地域で生まれた白人層であった。とりわけ、修道会の廃止で故地を亡命せざるを得なくなったイエズス会士に多かった。その代表例がメキシコのフランシスコ・ハビエル・クラビヘロ、チリ出身のファン・イグナシオ・モリーナである。ここではクラビヘロに触れる。

クラビヘロはイエズス会廃止の勅令が出ると、イタリアに移住しその地でイタリア語による『メキシコ古代史』を著した。イタリア語版を見ることができないので、スペイン語版で代用する⁶¹。その中で、第十巻の冒頭を見ると、彼の論敵が誰で、どの部分に彼が反応したかが良くわかる。それをまとめよう。論敵はドゥ・パウの『アメリカ人に関する哲学的論考』とビュフォンであり、パウに関しては要約が示される。十年に亘る研究と博識の成果というものの、真理をないがしろにし不条理なことばかりを書いている。おまけに聖書の記述をも軽視している。さらに、動植物や人間が新大陸の気候の苛烈さにより退化し、人々にしても習慣が悪癖に満ち、農業を放棄し、精神世界の産物として芸術なども劣り、道具の考案も不十分だ、とする。また、ビュフォンに対しては、『博物誌』の生物的分類は素晴らしいが、アメリカ大陸に関する記述は不適なものが多いとまとめている⁶²。こうして、彼は自然面、精神面の双方に亘って大著を展開するのである。

⁶⁰ *Ibid.*, pp. 29-30.

⁶¹ Francisco Xavier Clavijero, *Historia antigua de México* (México: Porrúa, 1991).

⁶² *Ibid.*, pp. 422-423.

3-3. アントネッロ・ジェルビの新大陸研究

18世紀には時の人でやがて忘却されたパウに再度焦点を当て、欧州人が新大陸に向ける視線を再検討したのが、イタリアのアントネッロ・ジェルビであった。ここではアメリカ研究者に至るジェルビについて、イタリア人名事典⁶³に依拠しつつ紹介しよう。

ジェルビは何よりもまず、イタリアのブルジョワの家系にあってユダヤ系の出身であり、ある意味、イタリア社会で大きな比重を持った人物であったと言える。1904年5月15日にフィレンツェ生まれ、1976年7月コモ地方のチヴェンネで死去した。ユダヤ系で、銀行・金融業の家系に属する。また、母方の叔父に歴史家で哲学者のアレッサンドロ・レヴィがいるし、叔母オルガ・レヴィは社会党代議士クラウディオ・トレヴェスが夫だった。このトレヴェス夫妻の息子に小説『キリストはエヴォリにとどまりぬ』で有名なカルロ・レーヴィがいるが、ジェルビとは従兄弟関係になる⁶⁴。

ジェルビは、政治に関与して評論を生産しただけでなく、学問的には法哲学やクローチェの思想に傾倒して、自然法的思考に懐疑を持ち、歴史主義に向かったようだ。1925年12月、法哲学に関する卒業論文を書いてローマ大学を卒業した。ここにはクローチェの哲学の影響が大きい。政治の関与はジャーナリストとしてであった。例えば、政党機関紙ラ・ジュステイティツィアなどに寄稿して文化評論風のコラムを担当している。その中では、新しい芸術様式である映画の理論についても記したらしい⁶⁵。

上記の関心から、ジェルビは啓蒙主義時代とそれに続くロマン主義時代の解明に力を尽くしたと言える。留学を通じてその研究を深めていった。そこで、彼はロックフェラー基金から奨学金を得て、ロンドン、ベルリン、ウィーンの各地に留学した。ベルリンでは1929年9月から半年間歴史学者

⁶³ R. Pertici, “Gerbi, Antonello”, in *Dizionario Biografico Italiana*, Vol. 53, (Roma: Istituto della Enciclopedia Italiana, 1999), pp. 385-388.

⁶⁴ *Ibid.*, p. 385.

⁶⁵ *Ibid.*, pp. 385-386.

マイネッケの演習に参加，歴史主義の起源について研究し，ロマン主義に対するドイツ人の関与した役割の大きさに瞠目した。また，1930年4月から31年7月までロンドン経済大学で政治学者ラスキーや哲学者ラッセルらに学んだ。1931年の8月から10月にはウィーンに移り，歴史学者プリブラムに学ぶ一方，ジェルビの妻になるヘルマ・シマリングとも知り合う。この間にもジャーナリストの仕事も中断しなかった⁶⁶。

ナチスの影がジェルビの運命を変え，アメリカ研究者としてのキャリアをも歩ませることになった。欧州留学を終了後，頭取の提案でイタリア商業銀行の研究所に勤務し，銀行組織や経済状況の比較研究などを行い，大学でも講義を担当した。しかし，ナチスに範を取った人種法の公布で，ユダヤ人のジェルビは失職した。幸運にも今回も頭取の勧めで1938年ペルーに移住，イタリア銀行のリマ支店，次いでペルー債権銀行に勤務して経済研究を担当した。その成果の一つ『前進するペルー：ペルーの経済地理』を出版した。ペルーの経済情勢を分析した著作だが，彼の名前は記されていない。他にも経済分析の記事を投稿した⁶⁷。

新大陸研究は，学生以来続く思想史研究と結合して，欧州が新大陸に注ぐ視線の研究へと深化し，1948年にイタリアに帰国して以後も続いた。ペルーに滞在中の1943年，『新大陸に関する論争：ヘーゲルの所説に関する注解』をスペイン語で出版した。これを基に，帰国後『新大陸に関する論争：1750年から1900年に至る論争の歴史』をイタリア語で出版した。これと並ぶペルー時代の博覧の成果が『インディアスの自然：クリストバル・コロロンからゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエドまで』で，1975年にイタリア語で出版した⁶⁸。

ここで上で挙げた，『新大陸に関する論争』が出版されるまでの経過と翻訳版について付記しておく。スペイン語の翻訳版には，ペルーにおける

(66) *Ibid.*, p. 386.

(67) *Ibid.*, pp. 386-387.

(68) *Ibid.*, pp. 387-388.

ジェルビのアメリカ研究の推移が記されているのでそれを利用しよう。ジェルビは1943年、ホルヘ・バサドレ主幹の雑誌『歴史』第四巻に“新大陸に関する昔の論争”なる論考を掲載した。これが短期間のうちに版を重ね増補もされた。1946年の第三版では三百頁の大部となる。同時に、副題の変更はジェルビの関心の軸が移ったことをも示した。すなわち、ヘーゲルへの関心から、“アメリカ意識の覚醒期における論争”へと変貌した。帰国後の1955年ミラノで最初のイタリア語版を出版した。実質新しい著作で、増補も行った。1960年にはこの書のスペイン語翻訳版がメキシコで出された。この中ではルポー師やブルーメンバッハ、ツイメルマン、ホリス、ペラマスらの言説を新たに収録している。引用は原文のままである。さらに、1973年にはピッツバーグ大学出版会から英訳⁶⁹⁾が出、スタンダーラらの章も加えた。英訳版では、原文が仏・蘭・独・伊語である引用文は英訳されている。スペイン語版は完全版を目指し、1982年に先の1960年版を増補してステュアート、ピオ・バロハに関する記事や18世紀末から19世紀初めのイタリアにおけるドウ・パウの受容をも収録した⁷⁰⁾。

まとめにかえて

ビュフォンは新大陸が淀んで腐敗した水に覆われている自然環境のため、四足獣を退化させていることを指摘した。慎重ながらも人間にもその退化が及ぶことを述べている。ただし、新大陸の住民は他所から移動した可能性があるのも、まだ若いともされている。しかし、ドウ・パウは、新大陸が好ましくない自然環境にあることはビュフォンと一致するが、住民は昔から大陸にいて退化して老衰の域に達したかのように見る。しかも新大陸の獲得を人類史的と言いつつも負の側面を強調する。啓蒙的文明圏の維持

⁶⁹⁾ Antonello Gerbi, *The Dispute of the New World: The History of a Polemic, 1750-1900*, trans. Jeremy Moyle (Pittsburgh Univ. Press, 2010).

⁷⁰⁾ Antonello Gerbi, *La disputa del Nuevo Mundo: Historia de una polémica, 1750-1900* (México: FCE, 1982), pp. 7-8.

には寧ろ住み分けが良く、海外進出に余り評価を与えていないかのようだ。

ドゥ・パウが時の人になったのは、旧世界の文明上の優越性の確認はもちろんだが、異様なイメージの新世界を強調したこと、神意を脇に置いて一種機械論的な世界像を示したこと、啓蒙的文明圏と「野蛮な」世界の非通約性、修道会の偽善と世界観を批判したこと等が喝采を浴びたからだと言える。ドゥ・パウと啓蒙主義者とに案外共通性があるのではないかという観点から、他の啓蒙主義者への影響、百科全書補遺における「アメリカ」の項目の記述、ビュフォン流の自然観による自然改変などにより注目していきたいと考える。